

翻訳絵本の脚本作りによる主体的で対話的な学び —理解の深化と豊かな表現を目指して—

丸山多賀子 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

1. 実践の場の特徴

本校は、公立の中等教育学校で、海外にルーツのある生徒が全校生徒の8割を占める。入学時に日本語運用テストを実施し、その結果により日本語支援の必要な生徒を決定する。対象となった生徒には最長2年間の支援が行われる。具体的には国語の時間を利用した日本語クラスと、理科・社会・数学の少人数クラスの設置、そして考査の翻訳などである。日本語クラスでは生徒のレベルに合わせた授業が行われる。細かい内容は担当の日本語講師に委ねられており、教材の選定から漢字の学習プリントの作成に至るまで、すべて生徒に合わせたものを用意する。また、他教科のTTにも入っているので、その内容を漢字のプリントや授業に反映し、なるべく統合的でスパイラルな学習になるように心がけている。

2. 対象生徒の課題

今回紹介する実践は、4人の中学2年生を対象に行ったものである。中国籍生徒2名は、小学高学年で来日している。残りの2名はアメリカからの帰国生徒である(JSLバンドスケールのレベル:「話す・聞く・読む」が7、「書く」は6)。4人に共通する主な課題は以下の3つである。

- 1) モダリティや終助詞などを使って文末表現を豊かにする。
- 2) 類義語・類義表現を使い分ける。
- 3) 自分の経験や想像したことを補足しながら、詳しく述べる。

週4回の日本語の授業と、週1回の放課後学習(60分)を行っている。上級クラスなので、国語の教科書を扱うが、前作業や後作業で「考える・産出する」活動を積極的に取り入れてきた。今回は2学期に行った実践について紹介する。

3. 具体的な実践の内容

3.1. 実践の目標

これまでも読解の後作業として劇や説明文の内容発表などを実施してきた。生徒は3年進級時から国語のクラスに合流するので、日本語クラスとしては最後の活動になる。その集大成として、準備段階から主体的で積極的に生徒が主導権を握るような活動にしようと考えた。

福富・土居(2020)によると、Readers Theater(以下RT)を初級クラスで行った結果、レベルによって違う効果を学習者自身が感じていたことがわかる。学習者は、初級前半は単語や文法などの運用面について、初級後半は読解や発音について効果的だったと評価している。福富・土居(2020)に例として載せられている音読劇の脚本は、一文を複数人で分読するものだったが、家本(1994)には、群読の技法や脚本例、演出まで様々な例が載っており、群読に適した作品として「リズムのある文体」で「いろいろな声を必要とする作品」であることが最低条件に挙げられている。今回の教材は、2年国語教科書にある『ポテト・スープが大好きな猫』¹⁾である。せりふはおじいさんしかない。けれども家本(1994)の「いろいろな声」というのは、登場人物が大勢いる作品であるとは限らない。登場人物が少なくても、たとえそれが猫であっても、脚本を作成する過程で、これまで読んできた様々な作品を思い出しながら、どんな声を出すか模索し、おじいさんの気持ちの変化を捉え、猫の声なき声を言葉にしていくことはできる。このことから、RTの発表は、先に挙げた彼らの課題に効果的な活動であると考えた。

また、生徒の一言も大きなきっかけとなった。生徒Aが「絵本²⁾のあとがきに、テキサスなまりの英語を翻訳するのは難しかったって書いてあるのがおもしろいね。たしかにテキサスの英語はなんか違う。説明できないけど。でもそういうのも考えて翻訳するんだね」と言った。その一言で、授業中、皆が「テキサスのじいなら、こんな感じ?」や「猫もテキサスなまりやったりして」などを考えるだけでなく、キャラクターそのものに近づき、なりきるためにどうすればいいかを考えるようになった。だから、RT発表会のために、まず村上春樹が苦労して訳したという原文を一人目が読み、残り三人の脚本を考えるという段取りを伝えたときも、「面白そう」や「原文は淡々と読んだほうがいからAさんにしようよ」などの積極的な反応が返ってきた。

3.2. 実践の内容

RT そのものにかけた時間は、練習も含め全6回である。けれども、この実践の前段階として「二段階の読解」と作文に16時間ほどかけた。「二段階の読解」とは、主たる教材に何らかに関連があり、読みやすい作品を先に読むことを意味する。今回は主たる教材として、『ポテト・スープが大好きな猫』を読むことにしたので、その前に「猫にかまけて」³⁾を読んだ。生徒は二つの作品を行ったり来たりしながら、猫に対する飼い主の態度の違いや共通点を読み比べた。授業では教科書だけでなく絵本も使った。猫が魚を捕る場面は本文では詳しく語られていないが、絵本には絵があるので、その絵を参考に「猫の魚捕り奮闘記」を作文し発表した。また生徒は、絵の細部からおじいさんと猫の日常や関係の深さを発見する楽しみも感じていた。物語は夜の場面で終わるが、その翌日を想像してつづきも書いた。時間をかけ、本文で詳しく書かれていないことをたくさん想像し読み込んだあと、RTに取り組んだ。

まず教師が例として、原文のあとに三人が分読してそれを繰り返すという形式のものを見せた。

例) 原文 おじいさんはテキサスの田舎で生まれ、そこで育った根っからのテキサスっ子です。

① おじいさんの出身地はテキサスの田舎です。

② おじいさんはテキサスの田舎で生まれ、そこで大きくなりました。

③ おじいさんはテキサスの田舎から出たことのない、根っからのテキサスっ子です。

しかし、生徒には不評で、「おじいさんが話すことにしようよ。おじいさんだから、わしはテキサスの田舎で生まれたんじゃにしようよ」という案が出てきた。結果、一人目は原文を読み、残りの三人は、おじいさんや猫になる形式になった。そして配役からセリフまで、すべて生徒が試行錯誤しながら仕上げた。最終的に、掛け合いあり、歌あり、アニメの決め台詞ありと、教師が最初に考えていたものよりバリエーション豊かな脚本になった。

4. 考察

完成した脚本からは、理解が深まっただけでなく、戦略的に日本語を使っていることもうかがえた。以下、脚本作成中に出てきた生徒の意見の中から、先に挙げた課題に対して成長を感じたものを挙げる。

- 1) 猫も老猫やん。だから車に乗るときには、「よいしょ」って言おうよ。
- 2) 急かす感じ、どうする？こんな感じ、どう？エンジンかけるぞー、ドア閉めるぞー。
- 3) ここは、おじいさんの様子を言うんじゃないで、気持ちを言ったほうがいいんじゃない？
- 4) 猫、怒ってるときだけ関西弁にしようよ。

一つ一つ内容を皆で振り返りながらセリフを出し合い、解釈がずれたときには話し合っていた。また、年齢差や男女差、終助詞や人称代名詞の選択、それに合う声色や抑揚を練習していた様子から、日本語を操ることを楽しんでいると感じた。そして対話により、教科書と外の世界（まんがやアニメ、映画）がつながり、友人の読書生活ともつながり、広がっていった。発表会当日は、映画館の注意アナウンスのまねを即興で挟んだり、おじいさんを真似てキャップをかぶることにしたりしながら、「魅せること」も十分意識できていた。発表後のアンケートからは、生徒自身、発表の準備で自分の日本語能力が上達したという感想や、気持ちを理解しながらセリフを考える難しさ、その気持ちになって発音する難しさを感じたことがわかった。

付記

本実践を発表するにあたり、いつもエンジン全開で答えてくれる生徒に感謝します。そしてその発表を見に来てくださり、生徒に惜しみない拍手をくださった学年の先生方に心より感謝申し上げます。

注)

- 1) 「ポテト・スープが大好きな猫」テリー・ファリッシュ作、村上春樹訳、『現代の国語2』三省堂、pp.250 - 255
- 2) 『ポテト・スープが大好きな猫』テリー・ファリッシュ作、バリー・ルート絵、村上春樹訳、講談社
- 3) 「猫にかまけて」町田康『斎藤孝のイッキによめる！名作選 小学6年生』pp26 - 42 所収、講談社

【引用文献】

家本芳郎 (1994) 『群読をつくる 脚本作りから発声・表現・演出まで』高文研
 福富七重・土居美有紀 (2020) 「日本語初級クラスにおける音読劇の試み」『南山大学外国人留学生別科紀要 第3号』南山大学外国語教育センター、pp.53 - 65